

医学放射線学会総会における 一般演題数の変遷に関する考察

早川克己

京都府立医科大学大学院医学研究科 放射線診断治療学

キーワード

JRS annual meeting, Number of General Abstracts

©日本放射線科専門医会・医会

はじめに

今回、JCR創立50周年を記念誌に投稿した原稿を補足して医学放射線学会総会における一般演題について考察した。きっかけは、2020年総会における金澤右先生の御講演「国内学会・研究会英語化の得失と対策」である。これは医学放射線学会でのプログラムのJCRアワーの中で「日医放総会における一般演題数の推移が2010年449題、2015年335題、2019年229題と減少傾向にあること」を報告された。2020年はコロナ自粛もありオンラインにて、128題、その後、総会プログラムから調べてみると、海外演題を含む演題総数は2021年283題、2022年213題、そして2023年は177題でそのうち、海外15題を含むので国内からは162題であり、ここ20～30年ほどでは、コロナ大爆発と外出規制の2020年の120題について、少ない一般演題数である。言うまでもなく、学会総会における一般演題は学問の進歩に欠かせないものであり、研究発表の場として重要な役割を果たすものであることは論を俟たない。特にこれまで見られた研究発表の場として放射線学会総会よりも海外の学会(RSNAやISMRMなど)を選択肢とする傾向もコロナパンデミックにて出来なくなったこの3年間では、研究成果の発表の場として相対的に放射線学会総会の役割がより重要になった期間にもかかわらず一般演題数が減少傾向にあることは非常に危惧すべき重要な問題である。

対象と方法

2019～2023年の5年間の放射線学会総会における一般演題数を日医放総会プログラムから調べた。教育講演や教育展示は除いた。また、各地域(地方会)ごとの演題数も調べてみた。同時に各地域の大学病院からの一般演題数も調査した。

結果

5年間の国内の総一般演題数は国内からは858題であった(Table 1)。年平均では172題になる。これは2010年449題、2015年335題と比べて明らかな演題数の減少を示している(Fig.1)。

このうち、大学病院と大学以外の病院からの演題比率は5年間平均にて76%であり、概ね70～80%を大学病院からの演題が占めていた(Table 1)。海外からの演題数は平均にて全体の18%であった。

各地域の一般演題数を全体数からの比率でみると、5年間平均にて、北日本:10.4%、関東甲信越:28.4%、中部:10.3%、関西:22.7%、中四国:12.9%、九州:15.3%であった(Table 2)。放射線科医の数が異なるので、専門医の数の比率は、北日本:9.2%、関東甲信越:29.2%、中部:11.4%、関西:21.2%、中四国:11.8%、九州:17.2%となり、それぞれ各地域の一般演題数比率と近い数字となった。医師比率に比して、演題比率が高いのは、北日

受領:2023年10月5日 採択:2023年12月25日

責任著者:早川克己

京都府立医科大学大学院医学研究科 放射線診断治療学
〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路 上る梶井町465
E-mail: hayakawakatsumi2006@yahoo.co.jp

Table 1 The number of general presentations at the annual meeting of the Japan Radiological Society during the five years from 2019 to 2023

Year	Domestic abstracts			Overseas abstracts	Total No.	Domestic abstracts
	No. of abstracts from universities	No. of abstracts from institutions excluding universities	No. of total abstracts			Abstracts Percentage form universities
2019	116	47	163	62	225	0.711
2020	90	31	121	7	128	0.737
2021	173	51	224	59	283	0.772
2022	150	37	187	42	229	0.802
2023	123	39	162	15	177	0.759
Total	652	206	858	185	1,043	0.759

Table 2 No. of abstracts per region over the five years

	Kita-nihon			Kanto-koshinetsu			Chubu			Kansai			Chuu-shikoku			Kyushu		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
2019	7	4	11	41	21	62	9	7	16	32	9	41	7	1	8	20	5	25
2020	7	1	8	28	10	38	7	4	11	23	13	14	8	1	9	17	3	20
2021	27	11	38	50	14	64	18	5	23	30	14	44	26	5	31	22	2	24
2022	16	1	17	33	10	43	12	5	17	33	9	42	26	6	32	30	6	36
2023	10	5	15	27	10	37	17	4	21	23	9	32	23	8	31	23	3	26
Total	67	22	89	179	65	245	63	25	86	141	53	173	90	21	112	112	19	131
No. of universities	10			26			10			12			10			11		
No. of abstracts per university	6.7			6.9			6.3			11.8			9			11.2		
4	10.40%			28.40%			10.30%			22.70%			12.90%			15.30%		
5	9.20%			29.20%			11.40%			21.20%			11.80%			17.20%		

- Note: 1. No. of abstracts from universities
 2. No. of abstracts from non-universities
 3. Total numbers
 4. Ratio of the number of abstracts per region to the total number of abstracts
 5. National Ratio of Board Certified Radiologist per region

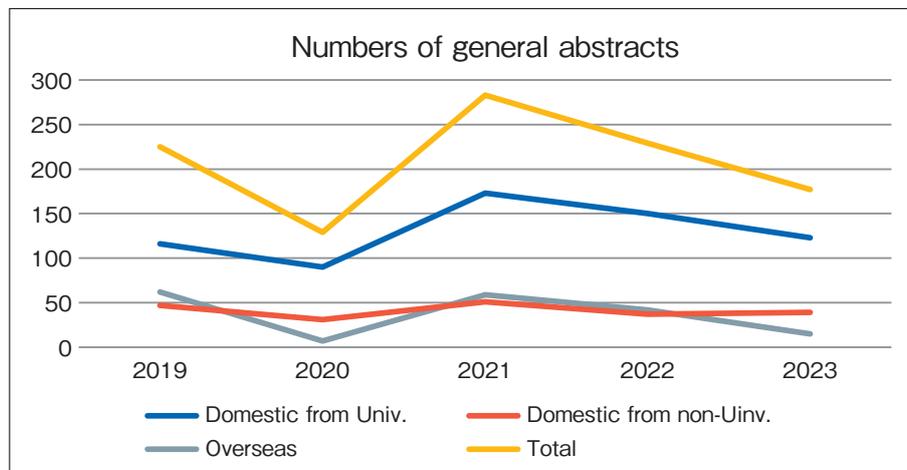


Fig.1 No. of general abstracts during the five years

- Note: Domestic Univ.: No. of domestic abstracts from universities
 Domestic non-Univ.: No. of domestic abstracts from non-universities
 Overseas: No. of abstracts from overseas countries
 Total: No. of total abstracts in each year

本、関西、中四国であったがわずかの差であった。

各地域の大学病院からの一般演題数にて一大学当たり5年間に何題の一般演題をだしたかをみると、北日本：6.7、関東甲信越：6.9、中部：6.3、関西：11.8、中四国：9.0、九州：11.2という結果であった（Table 2）。

考 察

今回、なぜ、一般演題数が減少しているのか？を考えてみた。2020年以降に関しては、COVID-19パンデミックによる影響が最大の原因と考えられるが、コロナ以前から、国内からの一般演題数は2018年191題、2019年163題であり、200演題を切る数値になっている。1都道府県あたりにすると、1県あたり3～4演題/年になる。また、各地域（地方会）ごとの演題数も調べてみた結果、それぞれ各地域の一般演題数比率に近い数字となるが医師比率に比して、演題比率が高いのは、北日本、関西、中四国である。また、各地域の大学病院からの一般演題数にて一大学当たり5年間に何題の一般演題をだしたかをみると、結果にて示したように西高東低であることがわかった。これは2018年のJapanese Journal of Radiology (JJR)にて隈丸先生の論文における放射線科医一人に対する各都道府県のCT/MRIの件数比率が関東から東北・北海道において高く、西日本ほど比率の低い事実と相関する可能性がある¹⁾

その原因としては、いくつかの理由があると思われるが、コロナパンデミック以外のものを考えてみた。

1. 専門医制度の導入以降は特に学会総会が単位取得の場と化していることが挙げられる。主催者側もそのような参加者の期待に応えたプログラムを提供していることもあり、以前は一般演題のプログラムしかない時間帯もあったが、最近では、すべて一般演題のプログラムの時間帯に単位が取得できる教育講演が重なっている。参加者にとって単位のとれるプログラムに流れるようになっている。また、若い医師の意識としても、総会が「研究発表を行った、それを聞きに行く場ではなく、単位取得の場」と認識が広まっていることもある。

2. 専門分野のsubspecialityの学会に演題を出す傾向があり、IVR学会や核医学会、放射線腫瘍学会、あるいは神経放射線学会や腹部放射線学会、磁気共鳴医学会(MRI学会)など各分野の専門家が集う学会へ演題が流れることも一つの要因の可能性がある。学会参加する放射線科医の心理としては、演題を出して研究発表を行うのはsubspecialityの学会にして、専門医資格の単位を取得するのを放射線学会総会にするという心理的な傾向もある

のではと推察できる。

そこで、subspecialityの学会の一般演題数を調べてみると、2022年の放射線腫瘍学会では、要望演題や看護セッション、多職種連携セッションを除いても、294題と多数の一般演題が出されていた(日医放2023での治療関係の一般演題数は21題)。本年開催のIVR学会総会では、179題の一般演題に対して、日医放2023ではIVR関係の一般演題は24題。第62回日本核医学会の2022年の総会では、一般演題数154題(世界核医学会と併催したので少な目)2021年の第61回日本核医学会総会の一般演題数は182題であるのに対して日医放2023での核医学演題数は17題。神経放射線学会の一般演題数はウェブ開催ということもあり、2022年61題、2023年45題であったが日医放2023での神経放射線の一般演題数は更に少なく16題であった。2022MRI学会での一般演題数は81題であった。もちろん、こうしたsubspecialityの学会の一般演題は放射線科医以外の医師からの演題も含まれているので、ほぼ放射線学会員のみである日医放総会の演題数と対等ではないのは自明ではあるが、放射線腫瘍学会やIVR学会、核医学会などの演題数が日医放総会の演題数に比べて圧倒的に多いことは、やはり研究発表の場としてsubspecialityの学会が優先されていることを示唆するものと考えられる。診断分野の場合には、神経放射線学会やMRI学会、小児放射線学会、骨軟部研究会など各種研究会やその分野などに流れる傾向があるのではと思われる。

3. もうひとつ大きい理由として、病院や大学における研究活動の低下の問題が深刻になっている問題があると思われる。その背景としては、働き方改革による研究時間への圧迫の問題が挙げられる。日常臨床が忙しすぎて、研究にまで手を出しにくい状況があると思われる。文部科学省は本年4月18日、「大学病院における医師の働き方に関する調査研究報告書」を公表した。医師の働き方改革の進捗状況や労働の現状、懸念などを調べた内容で、週当たり平均労働時間の内訳で研究が13.0%、教育が10.7%、診療が64.1%、その他が11.9%と診療が約3分の2を占めており、調査した全国医学部長病院長会議は「教育、研究の主力を担うべき助教の職にある者でさえ、約65%がこれらに充てる時間は週5時間以下で、全く行っていない者も15%に上るなど、深刻な状況であることが確認された」と警鐘を鳴らした(資料は文科省のホームページ)。以下に報告書の(追加)内容を一部(変更)紹介する²⁾。

働き方改革による「研究」への影響

「医師の働き方改革により労働時間が短縮されることによる「研究」への影響を尋ねたところ、影響が「ある」は

371人(38.0%)、「ややある」は231人(23.6%)で、61.6%がその影響を懸念している。」と記載されている。

また、掲載されている自由意見を紹介すると、「大学病院における業務の優先順位は①診療 ②教育 ③研究の順である。教育に割く時間ですら危惧される状態において③の研究にさける時間はない。特にこれからを担う若手医師がほぼ研究に従事できない、従事させられなくなる。日本の将来は、限られた時間とマンパワーの中での診療に追われ、将来への投資(教育, 研究)に費やす時間がなく、大変暗いものになると危惧せざるを得ない。」

この記事に対するm3.comからの意見を紹介します³⁾

「大学病院と医学系研究科を分離しないと難しいと思います。それぞれに人を雇用しないとキャパオーバーになるのは明らかです。普通の病院は病院の医者としての業務しかやっていないわけで、他学部の教員は教育者・研究者としての業務しかやっていません。なのに医学科だけが医者かつ教育者かつ研究者なんてできるわけないでしょう。まして給料は他学部と変わらないのに。実質病院の医者としての業務に給与が支払われていないのと同じですね。」

「時間外労働は「診療にしか申請できない」状態で、研究や教育に当てた時間は時間外労働として認められず「自己研鑽」です。これではモチベーションも上がりません。お金が全てとは思いませんが、何らかのインセンティブはあってもいいのでは、と思いつつも意見していますが全く取り合ってもらえません。」

などの意見が寄せられており、研究を行うことの大変さや困難さが大部分を占めている。更に、放射線科の場合には、人口比に対して多すぎるCT/MRI装置と放射線診断医の数が圧倒的にすくなすぎるという問題がある。このような読影業務の過負荷により、日常業務をこなすだけで疲弊し、研究などに割く時間的余裕がなかなかないと

いう問題があると思われ、これは最初に述べたCT・MRIの件数と放射線科医の人数において、件数が東高西低に対して演題数が西高東低であるということにも反映されていると考えられる。

4. パワハラという言葉の流行。放射線科の中堅や管理職の間に最近は「なにか若手の医師に学会発表について言及すると“パワハラ”と受け止めかねられない」という空気があるのではないかと感じることもあり、逆に、中堅医師の間に「若手に学会発表をするように」ということをためらう雰囲気はないかと推察される。なにか、事実に基づいて言っているわけではないが、そこにも、一般演題が減っている一因があるのではと思われる。

一般演題数が減少するいろいろな原因を考察したが、あたっていないこともあるであろうが、みんなで議論すべき問題と思われる。4番目に関しては、単なる推察であり、事実に基づいたことではないこと、また、いろいろな数字に関しては数え間違いも含まれている可能性があるので、その分はご容赦願いたい。なにかの参考になればと思い原稿にした次第である。

参考文献

- 1) Kumamaru KK, Machitori A, Koba R, et al. Global and Japanese regional variations in radiologist potential workload for computed tomography and magnetic resonance imaging examinations. *Japanese Journal of Radiology* 2018;36:273-281
- 2) 文科省ホームページ「大学病院における医師の働き方に関する調査研究」の調査結果の公表について[令和4年度 文部科学省 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究委託事業]大学病院における医師の働き方に関する調査研究報告書
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/iryuu/2023031_00003.htm
- 3) <https://community.m3.com/v2/app/messages/4470650>

A Study of Changes in the Number of General Abstracts at the Annual Meeting of the Radiological Society of Japan

Katsumi Hayakawa

Department of Radiology, Kyoto Prefectural University of Medicine

Abstract

The number of general presentations at the annual meeting of the Japan Radiological Society was analyzed for the past five years. The number of general presentations from Japan averaged about 170 per year, and it was found that the number of presentations has been decreasing even taking into account the situation of the COVID-19 pandemic. The reasons for this are discussed.

Keywords

JRS annual meeting, Number of General Abstracts

Received: October 5, 2023 Accepted: December 25, 2023

Corresponding author: Katsumi Hayakawa

Department of Radiology, Kyoto Prefectural University of Medicine

465 Kajii-cho, Kamigyo-ku, Kyoto, Kyoto 602-8566, Japan

E-mail: hayakawakatsumi2006@yahoo.co.jp